

前

入学試験問題

国語(B)

(配点八〇点)

平成十六年二月二十五日 九時三〇分～一一時一〇分

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、この問題冊子は全部で十五ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 三、解答には、必ず黒色鉛筆(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 四、解答用紙の指定欄に、受験番号(第一面二箇所)、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
- 五、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。記入箇所を誤った解答は、その解答に限り無効とします。
- 六、解答は、一行の枠内に二行以上書いてはいけません。
- 七、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白や裏面には、何も書いてはいけません。これらに違反した答案は、無効とします。
- 八、この問題冊子の余白は、草稿用にも使用してもよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 九、解答用紙および問題冊子は、持ち帰ってはいけません。

受験番号					
------	--	--	--	--	--

上欄に受験番号を記入しなさい。

第一 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

もとより個の没落は、生命倫理においてだけ見えてくるものではない。判断の基盤としての個人が遙かに乗り越えられてしまうというのは、環境問題の方がイメージしやすいだろう。たとえば殺虫剤や核エネルギーが現在の消費生活を支えている一方で、未だ生まれぬ世代の権利をシंगाイ^aしている可能性があるという事態に直面したとき、個人の欲望の制限を受け入れるためにも、後世代とのなんらかの共同性を、判断の新たな足場として構築しようとしていくのは、自然な流れだろう。人間以外の生物はもちろん、山や川などにさえ、尊重される価値を見出そうとする傾向は、今やさほど珍奇な印象を与えなくなったが、そこでは人間中心主義を排除しつつ、個人はもちろん、時間的広がりを含み込んだ人類さえも超えて、「地球という同一の生命維持システム」^aを行為規範の基盤として考えることが試みられるようになっていく。

だがことは、このような、いわゆる「問題」においてだけではない。日頃の生活のなかでも私たちは、個が希薄化し**トクメイ**^bのものかに解消されていくことを薄々感じている。なるほど今日ほど、個性的でありたいという欲望が広く行き渡っている時代は、少なくとも日本の場合、かつてなかったかもしれない。私たちは、きわめてたくさんの欲望をもつ。もちろん他人と同一の欲望をもつことに、安心感を覚える場合も多いが、衣服や自動車の選択に見られるように、周りを見回し他人と異なるものをもとうとすることも、少なくない。それは同一のものを巡る**コウソウ**^cを回避するためだけでなく、平均性を嫌い個性的であろうとする意志を示している。その結果欲望は、大量かつ多様に吐き出され、それに応じて実にさまざまなものが生み出されることになる。けれどもそうした**欲望の多様化**は、奇妙なことに画一化と矛盾せず進行している。「あなただけの……」と囁く**宣伝コピー**^dにもかかわらず、「私だけ」のはずのものに、どこか既製品の臭い^eがするのであり、「本当にお前が欲しいものはなんなのか」と自ら問い返して

みるならば、「本当に」という言葉の虚しい響きが経験されるだけだ。ここでいう「個性」とは、実は大量のパターンのヴェールに隠された画一的なものでしかなく、それへの志向は、私たちとはちがうどこか他所^{よそ}で作られ、いつのまにか私たちに宿り、あたかも私たち自身の内から生じたかのように、私たちを駆り立てていく。そのような欲望の産地を、消費生活の中心にいるかに見える個人、たとえばデザイナーなどに求めても虚しいことは、だれもが知っている。彼もまた大衆の周りを回っている。むしろ欲望のゲ^dンセンは、相互に絡み合つて生成消滅している情報であり、個人はその情報が行き交う交差点でしかない。急速に広まった情報のネットワークを支えているコンピュータ技術自体がプログラム上に原理的に欠陥をもつことによつて、「責任」の所在はおろか、その概念の意味さえ曖昧^{あいまい}になつているといわれる。近代思想のなかで「責任」が、悪にも傾く自由をもつた同一の行為主体としての自己存在のメルクマール^{メルクマール}だったことからすれば、「責任」概念の曖昧化は、自己存在が情報の網目へと解体されていくことを示唆する現象であろう。いずれにせよ、自己が情報によつて組織化されるという、この傾向は、ますます一層^eソクシンされていくにちがいない。携帯電話がインターネットに組み込まれた今日、大衆のなかでの奇妙な孤独という形で、わずかに一人の時間が許されていた通勤電車のなかにさえ、外部からの組織化が浸透していく。

このように個の解体が、現代も続く同じ一つの流れだとすると、集団からの個の救済というシナリオに、少なくとも私は、リアリティを感じないといわざるをえない。個が他のなものにも拠^よらず存在しているのであれば、それはそもそも解体しようもないだろう。それが解体してしまうのは、個^ウそのものが集団のなかで作られていく作りものすぎないからであり、集団への個の解体とは、個のそうしたフィクショナルな存在性格が露呈してきたことだと、私は考えるのである。

しかしながら、さらに重要なことだが、集団への解体が進行していくといつても、個に代わつて集団が、時代を画す新たな「実体」として登場したということこそ、承認しようというわけでは断じてない。生命倫理などで繰り返される「社会的合意」の「社会」なるものが、いかに捉^{とら}えどころのないものであるかは、その「合意」の確認の困難さからも想像がつく。いや合意達成の要求そのものが、一致へとは到りがたい多様な意見・価値観の存在を示唆しているのであり、そんななかで合意が達成され機能するとしても、それは当の合意が普遍的な基準を表現しているからではなく、「合意した^エ」という事実だけが、それを合意として機能させてい

るにすぎない。そういう意味でいえば、「合意」とはまさに形成されたもの、作りものであり、それが「事実」と呼ばれるとしても、^{ファクト}作る作用に支えられた事実でしかないのである。

環境問題の場合、倫理学説の構築の努力は、あるいは感情移入をもって、あるいは権利上の均等性の想定をもって、世代間の距離を乗り越えていこうとするわけだが、基盤となるはずの未来世代との「道徳的共同体」は、未だ存在せぬ者たちと関わるかぎり、どうあつても虚構的性格をもたざるをえまい。「将来世代の状況や価値観が私たちにとつて原理的に予測できない」ということ、また「私たちが自分たちの利益を制限するのに対して、将来世代がなにも返さない」ということなどは、そうした虚構性が露呈した場所として、実際この試みを否定しようとする意志が入り込むスペースとなっており、その意志を退けるよすがとなるものもまた、結局「想像力」しかないようである。あるいは人間を「自然との共感と相互性」のなかにもち込もうとするかの努力も、まちがいになく一つの創作でしかなく、生態系にまで認められるとされる「価値」という、非人間中心主義であるはずのものからは、作りもの特有の人間臭さが漂ってくる。もとより個がそこへと溶解していく情報の網の目も、相互に依存し合い絶えず組み替えられ作られていく、非実体的なものにはかならない。そうだとすれば集団性のなかへ解体していったといつても、そこに個は、新たな別の大陸を見出したのではなく、せいぜいのところ波立つ大海に幻のように現われる浮き島に、ひとときの宿りをしてにすぎないのである。

(伊藤徹「柳宗悦 手としての人間」)

[注] ○メルクマール——Merkmal(ドイツ語) 目印、指標。

設問

(一) 『地球という同一の生命維持システム』を行為規範の基盤として考える(傍線部ア)とあるが、どういふことか、説明せよ。

(二) 「欲望の多様化は、奇妙なことに画一化と矛盾せず進行している」(傍線部イ)とあるが、なぜそのようにいえるのか、説明せよ。

(三) 「個そのものが集団のなかで作られていく作りものにすぎない」(傍線部ウ)とあるが、なぜそのようにいえるのか、説明せよ。

(四) 「合意した」という事実だけが、それを合意として機能させているにすぎない」(傍線部エ)とあるが、どういふことか、説明せよ。

(五) 「非人間中心主義であるはずのものからは、作りもの特有の人間臭さが漂ってくる」(傍線部オ)とあるが、ここで筆者はどのようなことを言おうとしているのか、一〇〇字以上二〇〇字以内で説明せよ。(句読点も一字として数える。なお、採点においては、表記についても考慮する。)

(六) 傍線部 a・b・c・d・e のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a シンガイ

b トクメイ

c コウソウ

d ゲンセン

e ソクシン

第二問

次の文章は、尾張藩名古屋城内に仕える女性が、七年ぶりに江戸の実家に帰る場面である。これを読んで後の設問に答えよ。

こゆるぎの磯ちかき苦屋の内にも、難遊びするをとめどもは、桃、山吹の花など、こちたきまで瓶にさし、けふの日の暮るるを惜しと思へるさまなり。野に出でてははこなど摘むもあるは、けふの餅のためなるべし。

七とせのむかし、この所を過ぎけるは九月九日にて、別れ来し親はらからのことなど思ひ出でて悲しかりしに、けふは一二日のうちに逢ひみんことを思へば、うれしきあまり、心さへときめきして、それとなくうち笑みがちなるを、かたへなる人らは、ものぐるほしきにやなども思ふらんよ。明日は府にまゐれば、公、私の用意ありとて、男のかぎり、みな戸塚の宿にといそぐまゝに、ひとりのどかにも行きがたくて、同じさまにやどりにつきぬ。

三日の夜より雨ふりいでて、つとめてもなほやまず。金川、河崎、品川などいふ駅々もただ過ぎに過ぎきて、芝にまゐる。こより大路のさま、たかき賤しき袖をつらね、馬、車たてぬぎに行きかひ、はえはえしく賑はへるけしき、七とせのねぶり一とぎにさめし心地して、うれしさいはんかたなし。その夜は御館にありて、三月五日といふに、ふるき家居にはかへりぬ。

いふかひなければ、親族のかぎり、近きはをば、いとこなど待ちあつまりて、とりどりに何事をいふも、まつおぼえず。をさなき妹のひとりありしも、いつかねびまさりて、髪などあげたれば、わが方には見わすれたるを、かれよりうち出でんもつつましくやありけん、をばの後ろにかくれて、なま恨めしと思へるけしきに見おこせたるまま、なほ心得ずして、「そこにもし給ふは、いづれよりの客人にかおはず。ゆゆしげなることには待れど、過ぎ行き侍りし母のおもかげに、あさましきまで似かよひ給ふめるは」と問へば、かれはうつぶしになりて、つらもまたげず。をばも鼻せまりてものいひやらず。みな「は」と笑ふにぞ、はじめて心つきぬ。

〔注〕

○こゆるぎの磯——神奈川県大磯町付近の海辺。歌枕。

○ははこ——ゴギョウのこと。まぜて草餅を作る。

○府——江戸。

○戸塚の宿——東海道五番目の宿場。日本橋より一日分の行程。

○金川・河崎・品川——それぞれ東海道三番目・二番目・一番目の宿場。

○芝——現東京都港区。飯倉神明宮・増上寺などがある。

○御館——尾張藩の江戸藩邸。

設問

(一) 傍線部ア・エ・オを現代語訳せよ。

(二) 傍線部イについて、「うち笑みがち」なのはなぜか、簡潔に説明せよ。

(三) 傍線部ウ「うれしさいはんかたなし」とあるが、なぜうれしいのか、簡潔に説明せよ。

(四) 傍線部力「なほ心得ずして」とあるが、何を「心得」なかったのか、説明せよ。

第三問

次の文章は、北宋の蘇軾（一〇三六—一一〇一）が書いたものである。これを読んで、後の設問に答えよ。

歐陽文忠公嘗言、「有患疾者。医問其得疾之由。曰、『乘船遇風、驚而得之。』医取多年柁牙為柁工手汗所漬处、刮末、雜丹砂・茯神之流、飲之而癒。」今、『本草注別藥性論』云、止汗、用麻黄根節及故竹扇為末服之。文忠因言、「医以意用藥多此比。初似兒戲、然或有驗、殆未易致詰也。」予因謂公、「以筆墨燒灰、飲學者、当治昏惰耶。推此而廣之、則飲伯夷之盥水、可以療貪、舐樊噲之盾、可以治怯矣。」公遂大笑。

（『東坡志林』による）

設問

〔注〕 ○歐陽文忠公——宋の文人・歐陽修（一〇〇七—七二二）のこと。 ○柁牙——柁は舵のこと。柁牙は舵を操作する際に握る部分。 ○丹砂・茯神・麻黄——いずれも中国医学で用いられる薬材の名。 ○『本草注別薬性論』——唐の甄権しんけんが著した中国医薬の書。 ○致詰——物事を見極めること。 ○伯夷——周の武王による殷の討伐を道徳に反ずるとして、周の食べ物を口にせず、餓死したといわれる人物。 ○盥水——手を洗った水。 ○樊噲——項羽が劉邦の暗殺を謀った鴻門の会で、劉邦の命を救った武將。

(一) 「医以意用薬」とあるが、

(ア) これはどういうことか。わかりやすく説明せよ。

(イ) 文中に挙げられている「医以意用薬」の例から一つを選び、簡潔に要約して述べよ。

(二) 「初似_レ兒戲、然或有_レ驗、殆未_レ易_レ致詰_レ也」を、何を「致詰」するかを明らかにして、平易な現代語に訳せ。

(三) 「公遂大笑」とあるが、「公」はなぜ「大笑」したのか。全文の趣旨をふまえて、簡潔に述べよ。